



会報

会報 第7号

平成27年4月発行

内藤恒雄駿河半紙技術研究会会長に聞く

手漉き和紙の現在・過去・未来

——平成二十八年五月で独立四十年を迎えるそうですが、現在の心境を教えてください。

一言で言っても、よく続けてこられたと思う。どの仕事でも同じだと思って諦めず、やってきたこと、そしてあまり気負わず、続けられるのであれば続けるという気持ちでやってきた。その積み重ねの結果が、四十年につながったと思う。

——一口に四十年と言いますが、いろいろご苦労もあったでしょう。お聞かせいただけますか？

独立する前に、埼玉県の小川町など三か所で六年間、手漉き和紙の技術を習得してからこの地(旧・静岡県富士郡芝川町上柚野)で独立した。営業に関しては全くの素人だったが、独立してから自分で販路を切り開いていった。最初は都内や県内の民芸



店に、ステーションナリーなどとして置かせてもらっていた。和紙の小売店にも営業に歩いたこともある。そこでは価格競争に勝つていく必要があることが分かったが、工房で

一人で作っていくにはかなり厳しいものがあつた。

一方で、美術に関心があり、美術素紙としてお使い

いただけないかと考え、手漉き和紙に関心があつて、手漉き和紙をお

使いになる作家さんを選んで営業をした

ところ、版画や書、工芸などの世界では需要があることが分かった。それからはそれ

ぞれの作家さんに直接お会いし、手漉き和紙の使い方を教わりながら、それぞれの用途に合う紙を漉いて納めるようにした。皇

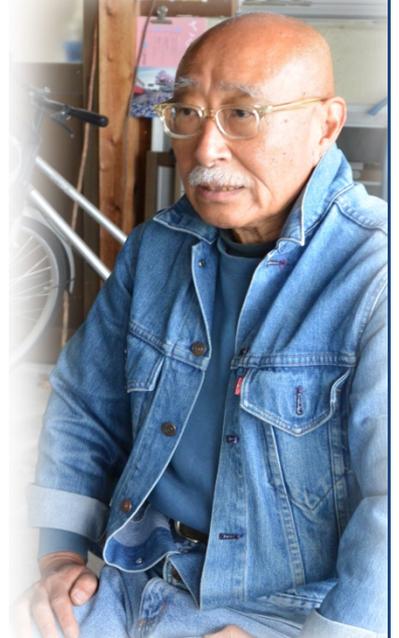
后陛下にもお買い上げいただいたことは光栄なことだと思つている。

——昨年、日本の手漉き和紙技術がユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。

石州半紙、本美濃紙、細川紙が代表として名前を連ねました。ご感想をお聞かせください。

手漉き和紙のキャッチコピーとして「日本独自で世界に誇れる手仕事」であると考えられる。無形文化遺産に登録されたということは、手漉き和紙の技術そのものが評価されたということ、つまり世界に誇れる手仕事であることを認めてもらったということだと思つている。

現在、手漉き和紙は人間国宝三名、総合指定三か所となつているが、「どの誰」ではなく、手漉き和紙製作者すべてを認定したかどうか、ということが国内では話題になった。溜め漉きではなく流し漉き、乾



燥は板張り、というのが日本独自であり、毛羽立ちの少ない薄くて丈夫な紙を作る技術である。それに対して世界から「お墨付き」をいただいたようなものだと思つている。

——身近での変化はありましたか。

取材が増えた。特に白糸小学校で続けている卒業証書作りに関する取材が多かった。また、平成二十八年には、平成十二年に行つたドイツの博物館を訪れ、展示会を予定している。

——五月から、柚野紙漉き工房を「内藤恒雄 手漉き和紙 記念館」と名称を変更するそうですね。

今はまだ、毎年、紙の注文があり、それを捌くだけの気力も体力もあるが、いつまでも元気でいられる保障はない。もし体調を崩して紙を作れなくなっても、啓蒙活動は続けるつもりである。そのために、元気なうちに「記念館」として手漉き和紙の技術を後世に残す一助としてたい。これについては、観光施設としてだけでなく、あくまで文化的価値のある施設にこだわりたいと考えている。

「内藤恒雄 手漉き和紙 技法」

その① 紙漉き編に参加して

紙を平滑に漉くことができるようになったと思ひ込んでいた私は、次のステップ、紙床づけの壁にぶつかりました。漉きあがった簀を定規にあて、紙床板の上に手前から空気を入れない様に注意して転がし伏せていく。そして伏せた簀を紙からはがしていく。この、簀を紙からはがす作業時に、紙の一部がやぶれ、はがれていけません。先生がお手本で何度かやってみせてくださると、なんともきれいに簀が紙からはがれていくのです。不思議です。原因は色々あると思いますが、私なりに考えて、漉き方に問題があるのではないかと、先生に質問してみました。そして、紙漉きの基本動作が重要であると、アドバイスをいただきました。

昨年十一月十五日の『内藤恒雄 手漉き和紙 技法 その一 紙漉き編』講義の中の説明にもありましたが、

一、化粧水 漉舟の水を浅く全体にいきわたるように汲み、表面を作る

二、調子水 漉舟の水をやや深く汲み、簀桁を揺り動かし厚さを作る

三、捨て水 より平滑にするために、汲みこんだ水を揺り動かし、素早く流し捨てる。

これらが、紙漉きの基本動作だそうです。私は、紙を漉く際に、紙が崩れないようにすることばかり意識して、見た目では紙を平滑に漉けていると思ひ込んでいました。しかし、実は紙の表面にムラがあったため、簀に繊維がくっついてしまいきれいにはがれていかなかったのだという結論に達しました。次回は、基本

動作を意識し、この課題をクリアできるように試みたいと思います。 小林 智

その② 楮蒸し編に参加して

三月七日(土)に楮蒸しの講座が開かれました。楮は一年草なので、楮蒸しの作業は一年に一回、この時期に行われるそうです。

楮は紙の大事な原料の一つで、まず、楮を蒸して幹と皮に分けて黒皮を作り、これを煮てから外側の黒い部分をそぎ取って白皮にして、それをさらに叩解してようやく紙の原料となるそうです。今回は工房の庭で栽培している楮を使い、それを蒸して黒皮を作るまでの工程について実技講習をしていただきました。

工房ではすでに、講師の内藤さんが五右衛門風呂を思わせるような大きな釜に火を入れ、一メートルくらいに切りそろえて束ねた楮を蒸していました。待つこと三十分。(蒸す時間は約一時間半だそうです。九時前に火を入れてくださり、待ち時間を短くしていただきました。)蒸し上がるころには、香ばしくどこか懐かしいような匂いがしました。釜から出した楮の束にすぐに水を掛けて粗熱を取った後、皮むきを行いました。楮の枝を持ってねじるようにすると黒皮が動き、一か所裂いてそのまま皮をむきます。うまく蒸されていると気持ちよくつるんとむけてしまいます。皮と幹を分けるという単純な作業でしたが、大釜一杯分の楮の枝から黒皮をはぎとるのに、約一時間かかりました。この日はこれで終わりでしたが、この後の作業工程を経て紙になるまでにはずいぶん時間と手間がかかりました。紙への仕上げは、板張りで天日乾燥にこだわっていますから、さ

らに手間暇がかかります。それらについては、作業中にも内藤さんが力説していらっしやいました。スピードと効率を求められる時代に逆行しているかのようですが、だからこそ、確実な品質と美しさを千年以上も保持できたのだと思うと、一つ一つの作業がとても貴重なものになっています。

四条 里美

会員紹介【その三】

佐野源彦(富士宮市市議会議員)

昨秋、国連教育科学文化機関(ユネスコ)により「和紙・日本の手すき和紙技術」が無形文化遺産に登録されました。世界が認めた手すき和紙であります。内藤恒雄先生は埼玉県小川町で修業され、一九七六年(昭和五一年)に旧芝川町(現富士宮市)上柚野に手すき和紙工房を構えられ今年で三十九年目を迎えられると聞いております。早いものですね!私は和紙についての知識は多少なりとも知っておりましたが、内藤先生との出会いにより永い伝統を持つ手漉き和紙の技術に感動しました。また、この地にこのような先生がいることを誇りに思い、お付き合いさせていただいております。

日本の和紙の文化等を知ってもらおうと、当時友好関係を深めていたアフリカの大使館の方々に先生の作品等を贈呈したところ、興味を持っていただいたことを思い出します。

正確な技術伝承を目的に「駿河半紙技術研究会」が設立され、手すき和紙を取り巻く環境は厳しいなか技術を次世代に継承することの大切さを強く感じ、私も会員として参加させていただいております。伝統手法で漉く、地元こだわ

ことで地域の特色が出せブランド化するなど今後行政も含め皆で伝統文化を継承することも必要と考えます。また若手が参画しやすい環境等が必要となります。良い伝統を守るためには、時代のニーズに合わせ変化することも大事であります。

地道ではありますが、先生の日々精進されている姿を通し、今後、益々のご活躍を期待し「駿河半紙技術研究会」の発展を願います。

松本貞彦(富士市市議会議員)

私が主宰する「富士てがみまつり」が先頃十八回目を迎えました。

私達の町は、紙のまち、かぐや姫伝説が伝わる富士市です。私の住む比奈に、平成二年、かぐや姫に因んで「竹採公園」が整備されました。これを記念して「かぐや姫宛の手紙文コンクール」を主題にした「富士てがみまつり」が発足しました。

その一回目のまつりの時に内藤恒雄さんをご紹介いただき、私たちの町に紙漉きの達人がいることを知りました。そしてまつり会場に手漉き和紙を展示させていただきました。私の住む富士愛鷹の地にも、かつて「三楯」が栽培され、これをもとに紙漉きをした人たちがあり、現在でも楡林にその痕跡を求めることが出来ます。その後、内藤先生を工房をお訪ねしたり、何回か展示会を見学させていただき、心に深く感銘を受けてまいりました。その活動が国内は勿論のこと、海外にまでご発展されました。地域伝統文化功労者表彰受賞を機に富士山の見える地で、更に「精進」されたいことをご祈念申し上げます。